

2026 年度 入学試験問題

国 語

(1 科目 100 点 50 分)

2026 年 2 月 5 日 (木) 1 時限目実施

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この注意事項は、よく読んでください。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
4. 次のことには十分注意してください。
 - ① 解答用紙には、受験番号を記入することを忘れないこと。
 - ② 答えはすべて解答用紙に記入すること。
 - ③ 不正行為はしないこと。

解答については、間違いのないように十分注意し、記入してください。

東 奥 義 塾 高 等 学 校

一

放送をよく聞いて、問いに答えなさい。
※メモを取ってもかまいません。

二 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～⑭の傍線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に、それぞれ書き改めなさい。

- | | | | |
|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|
| ① 環境の変化に <u>順応</u> する。 | ② 伝統文化を <u>継承</u> する。 | ③ 反対意見を <u>排除</u> する。 | ④ 懸命な努力が <u>報</u> われる。 |
| ⑤ 図書館までの道を <u>尋</u> ねる。 | ⑥ <u>傘</u> をかかえて歩く。 | ⑦ 休憩の場所を <u>設</u> ける。 | ⑧ 彼は <u>レイギ</u> 正しい。 |
| ⑨ 元気に <u>アイサツ</u> する。 | ⑩ 細かな <u>ギロン</u> を重ねる。 | ⑪ 経済の <u>フツコウ</u> をめざす。 | ⑫ 大会を <u>カイサイ</u> する。 |
| ⑬ 他国と <u>コウシヨウ</u> する。 | ⑭ 合理的に <u>ハンダン</u> する。 | | |

問二 次の①～②の傍線部の意味として正しいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 相手の状況を考慮する。

- | | | | |
|-----------|-----------|----------|------------|
| ア しっかり覚える | イ いろいろ考える | ウ 予想して待つ | エ かわいそうに思う |
|-----------|-----------|----------|------------|

② 率直な意見を聞かせてほしい。

- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| ア 思いを正直に言う様子 | イ 丁寧で遠回しな様子 | ウ おどおどと話す様子 | エ 専門的で難しい様子 |
|--------------|-------------|-------------|-------------|

〔問題は次のページにつづきます〕

【三】 次の(1)、(2)に答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

(1) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【漢文】

晋^{しん}車^{しや}胤^{いん}、幼^{ニシテ}恭勤博覧^{ナリ}。家貧^{シクシテ}不^ニ常^{ニハ}得^レ油^ヲ。夏月^{ニハ}以^{ツテ}練囊^{れん なる}盛^リ数十^ニ萤火^{けい けい}、照^{ラシメ}書^ヲ読^ミ之^ヲ、以^{ツテ}夜^ヲ繼^グ日^ニ。後、
官^ハ至^ル尚書郎^ニ。晋^ノ孫康^{そん かつ}、少^ニ清介^{わかつた}、交遊^ハ不^レ雜^{ナラ}。家貧^{シクシテ}無^レ油^シ。嘗^{かつ}映^{ジテ}雪^ニ。【A】書^ヲ後、官^ハ至^ル御史大夫^ニ。 ※1 ※2 ※3 ※4

【書き下し文】

晋の車胤、幼にして恭勤博覧なり。家貧しくして常には油を得ず。夏月には練囊を以つて数十の萤火を盛り、書を照らして幼い時から熱心に勉強して博学であつた。夏には絹の袋に数十匹の螢を入れて

之を読み、夜を以つて日に繼ぐ。後、官は尚書郎に至る。

昼も夜も勉学に励んだ。その後、官職は尚書郎にまでなつた。

晋の孫康は、少くして清介、交遊は雑ならず。家貧しくして油無し。嘗て雪に映じて書を

A

。後、官は御史大夫に至る。

若い時からきまじめでいい加減な人付き合いをしなかった。

以前には

その後、官職は御史大夫にまでなった。

出典 『晋書』

※1 車胤……人名。晋は当時の国の名前。 ※2 尚書郎……皇帝が発する文書などをつかさどる役職。

※3 孫康……人名。

※4 御史大夫……役人の不正をただす役職。

問一 二重傍線部「以^{ツテ}夜^ヲ繼^グ日^ニ」について、【書き下し文】を参考にして返り点をつけなさい。(送りがなは書かなくてよい)

問二 【漢文】の**A**にあてはまる漢字を、一字で抜き出して書きなさい。(送りがなは書かなくてよい)

問三 ある生徒が本文の内容を次のようにまとめました。**X**に入る適切な内容を、十字以内で書きなさい。また、**Y**にあてはまる最も適当なものを、後のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

車胤も孫康も、家が貧しくて**X**ための油を手に入れられなかった。そこで、車胤は螢を袋に入れて、孫康は雪に反射した月の光を利用してそれぞれ夜も勉学に励んだ。その結果、二人とも重要な役職の役人になって活躍した。この出来事から「**Y**」という意味の「螢雪の功」という言葉が生まれた。

- ア 苦勞して学問にはげんで成果をあげること。
- イ 他人の行動を自分の成長のために生かすこと。
- ウ 人生の幸・不幸とは予測できないものだ。
- エ 子どもの教育には適した環境が大切である。

(2) 次の和歌を読んで、後の問いに答えなさい。

君待つと吾が①恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く 額田王

世の中は何か常なる②あすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる 詠み人しらず

問四 傍線部①「恋ひをれば」をすべてひらがなで現代かなづかいに書き改めなさい。

問五 傍線部②「あすか川」には掛詞が用いられています。川の名前のほかに込められている意味を漢字で書きなさい。

〔四〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることにします。

昔、※¹修身の教科書にこんな話があった。ある子どもが、「狼が出た！」とうそをつく。村人は子どもを助けようとどきどき出してくるが、うそだとわかって怒って引きあげる。それが面白かったので、子どもは何度もうそをついて、大人の混乱を楽しんでいる。ところが、ある日、本当に狼が出てきた。子どもは「狼が出た！」と叫ぶが、「村人はだれも助けに来ませんでした」というのである。

せっかく修身で習ったことは応用すべきであろう。そこで、ある子どもが「百万円が落ちている！」と叫ぶ。大人たちは分け前にあずかるうとどきどき出してくるが、うそとわかってがっかりする。その子はそれをたびたび繰り返して大人たちを惑わして楽しんでいた。ところがある日、百万円が本当に落ちていた。子どもは「百万円が落ちている」と叫ぶが、「村人は誰も拾いに来ませんでした」ということになる。

こんなことを言うとき「冗談も休み休み言え」と叱られそうなので、もう少し「マジメ」なことを―それも休み休み―述べてみたい。ともかく、「うそから出たまこと」という表現もあるように、「A」はあんがい「B」を引き出してくる力をもっているようである。「百万円」のようなことは、それほど簡単に事が運ばないかも知れないが、「今年こそ本を一冊書くぞ」などと、うそを言い続けていると、本気にする人も出てきて、^{もうしわけ}申訳ないと思つて何とか努力しているうちに、本当のことになつてしまふ、ということはあるのである。

「うそ」になつては申訳ない、というので随分と慎重にものを言う人がある。本当のところは、やれそうに思っていることでも、うっかり言つてしまつてうそになつてはいけないと思ひ、やれるかどうかわかりませんなどと言つていふうちに、本当にそのとおり、なかなかやれなくなつてしまふことになる。結局はうそでも何でも、やれると言つていた方がよかつたのではなからうか、と思えるのである。

しかし、まことが出てくるまでうそをつくのほ、それほど①簡単ではない。修身の教科書を見てもわかるように、一回うそをついただけでは駄目で、本当になるまでには、大分繰り返し返しうそをつかなければならぬらしい。これも面白いことではあるが、時には、うそつきだと怒られることもあるし、もう信用しないぞ、などと言う人もある。それに耐えてうそをつき通すためには大分忍耐や勇氣などを必要とすることであろう。それだけのしたたかさがあつて、はじめてうそからまことが生まれるのかもしれない。なかなか、うそをつき通すのも大変なことだ。

本当のことでも言葉にしようと思っしんないのでは、といううな怖さがあつて、なかなかそのま言えぬときがある。たとえば、プロ野球などでもう優勝といううなときに、うっかり「優勝」と言つてしまふと、何だか逃げてゆきそうに思えたり、^{きもち}気がしたり、そこで、監督は「まだまだ優勝など考えもしない」と言うのだが、その実、心の中では優勝のことをずっと考えてるというわけである。こんなときは、腹のなかでは、優勝するぞ、とか、優勝してみせるぞとか思いながら、②「優勝のことなど念頭にない」といううなうそをつくわけだから、少し手がこんでる。

このうなときは、現実が相当目の前にちらつてるわけで、うそから出たまこと、という次元での「C」の話とは異なるものと考えた方がよさそうである。ただ、本当のことを腹で思いながら、うそを言い続けるところに、うそと真実の関連性を考ふる上で興味を感じさせられる。

うそから出たまことが活用できる、もうひとつの場合は、他人をほめることだろう。たとえば、Dとわかつていても、誰か他人に対して、あなたは熱心な人だ、とか、あなたの誠実さには感心した、などと言いつけてると、だんだん、それは「E」になつてくることが多い。うそと思う人はやつてみるといい。もつとも、この「うそを言い続ける」ということは、先にあげた例の場合と同様に、実に難しいことである。「あなたは熱心な人だ」と、二、三回は言うとしても、その人が怠けてるのを見たあとでも、なお言い続けるのは大変である。それをしたからといって、別に自分は何も損しないのだからやつてもよさそうなものだが、なかなか出来ない。

うそからまことが出てくるのは、本当のことだとしても、ただ、人間というものは、うそを繰り返し言うのが、あんがい苦手なのだろう。そこで、他人をほめるにしろ、自分のやりたいことを言うにしろ、その「うそ」のなかに、何らかの真実味がこもつてることが必要で、それをどうやつて見つけ出してゆくかがポイントなのであろう。

出典 河合 隼雄『こころの処方箋』

※1 修身……旧制の小・中学校などで教えた学科の一つ。現在の道徳にあたる。

問一 二重傍線部「面白い」は形容詞です。次のア～エの中から形容詞ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤い花が咲く。

イ 春の桜はきれいだ。

ウ 美しい星空を眺める。

エ 偶然友人に会えてうれしい。

問二 空欄 A・B・C・D・E には「うそ」か「まこと」のどちらかの言葉が入ります。空欄に入るものをそれぞれ選び、書きなさい。

問三 傍線部①「簡単ではない」とありますが、その理由について次のようにまとめました。空欄に入る最も適当な内容を、本文中から二十六字でそのまま抜き出して書きなさい。

「まこと」を引き出してくるまで

から。

問四 傍線部②「優勝のことなど念頭にない」とありますが、なぜこのようなうそをつくのか。その理由として合わないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「優勝」と言葉にすることで、優勝から遠ざかってしまう気がするから。

イ 「優勝」と口にしたのにも関わらず、優勝できなかった時に申訳ないから。

ウ 「優勝」と言ってしまうことで、気がゆるんで集中できなくなってしまうから。

エ 「優勝」と口にすることで、叶わないのではないかという恐怖があるから。

問五 ある学級で、本文を読んだあとで話し合いをしました。次は山本さんのグループが話し合っている様子です。 ☐X と ☐Z に

入る適切な内容を、それぞれ十六字以内で考えて書きなさい。また ☐Y に当てはまる言葉を本文中から八字で抜き出さない。

山本 うそはよくないけど、それが本当になるなら口に出しておいたほうがいいのかもね。

佐川 でも繰り返しうそをつくことはとても難しいことだと言われていたね。

藤田 うそをつくのも大変だけど、本当のことを言うのもためらわれるときがあるね。

佐川 本当になるまでうそをつく話とは別に、 ☐X からうそをつくときもあるんだね。

藤田 それでもやっぱり、人はうそをつき通すことが苦手だと思うな。

山本 この話において、うそをつく時には ☐Y ことと ☐Z ことが大切なんだね。

【五】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

高校生の「怜」の家は、さびれた餅湯温泉駅前商店街で小さな土産物屋を営んでいる。「怜」は小学校からの幼なじみである「丸山（マルちゃん）」「心平」竜人と同じ高校に通っているが、ある日「怜」と「マルちゃん」は「心平」の作った馬の埴輪を目にする。それはとても精巧な出来であった。

※「寿絵と交代し、店じまいをしていたら、洗面器に石罅やらタオルやらを入れた丸山がやってきた。

「おう、マルちゃん。心平のこと聞いた？」

「聞いた」

丸山はなぜか浮かない表情でうなずいた。「竜人に博物館へ誘われたけど、断ったよ」

「俺も。ほっときやいいんだ、あいつらのことは」

「うん……」

「どした？　なんかあった？」

「ううん……」

力なく首を振った丸山は、気を取りなおしたようにあえて明るく、「怜も風呂行かない？」

と持ちかけてきた。怜はすでに夕飯まえ、家の風呂に入っていたが、もちろん、

「①いいね。ちよつと待ってて」

と答えた。

（ 中略 ）

手早く髪と体を洗い、二人そろって湯船に浸かると、自然と「ふいー」と声が出た。ここの湯は無色透明だが、ほのかに海の香りがし、舐めると少ししよっぱい。

『餅の湯』に來た夜つて、布団に入るとなんか足がむずむずするときがある」

と、怜は洗い場に立ちこめる湯氣を見ながら言った。

「俺もある。血行がよくなるからかな」

「見た目はふふうのお湯と変わらないのに、温泉つて不思議だね」

会話が途切れ、怜は隣にいる丸山をさりげなくうかがった。丸山は電灯を映して揺れる湯面を眺めている。ふくふくとした耳たぶが熱氣のせいで少し赤くなっている。

「②俺さ、自分がいやになつたよ」

しばしの沈黙ののち、丸山が静かに話した。

「どうして」

「心平が美大受けることにしたの、知ってる？」

「いや、初耳」

怜はびっくりし、湯のなかで丸山のほうに体を向けた。「いまからやってまにあうもんなの？ デッサンとか大変なんだろう」

「※₂ 山本先生も驚いたみたいで、俺や美術の林先生にいろいろ聞いてきたよ」

山本先生の慌てぶりを思い出したのか、丸山はちよつと笑った。「俺が通つてる丘の麓ふもとの絵画教室を紹介してあげた。心平は部活があるから土日しか来られないし、まだ初級者コースだけど、デッサンはどんどんうまくなつてる」

「学科だつてあるのに、あいつなに考えてんだ」

「そつちはまた俺たちが特訓してあげればいいんじゃない」

丸山はあくまでも※₃鷹揚おうようである。「怜もこのあいだ、心平が粘土で作った馬の埴輪を見たでしょ。才能つてこういうことなのかなあつて、

俺はつくづく思った」

「もしかして心平、土器づくりが楽しかったことを思い出して、美大を受けるなんて言い出したの？」

「詳しくは聞いてないけど、そうなんじゃないかな。絵画よりは陶芸とか彫刻とか、立体物に興味があるみたいだったし」

お湯から出した手で顔をぬぐった丸山は、ついでに表面張力を楽しむように、掌で二度ほど湯を叩いた。その行為に、丸山にしてはめずらしいいらだちを感じて、

「だけどうして、マルちゃんが自分をいやになるんだよ」

と、怜は A 尋ねた。

「心平が指を骨折したって聞いたとき」

丸山は低くかすれた声で言った。「俺はまっさきに『じゃあしばらくデッサンの練習できないな』と思った。そのまま美大受験に飽きてくればもつといいのになって喜んだ」

怜は咄嗟に言葉が出なかった。そうか、マルちゃんは心平に嫉妬して、でもそんな自分がたまらなくいやなんだ。

二月にあった文化祭で、丸山が出品した絵が思い浮かんだ。ずっと取り組んでいたその油絵は、餅湯城と青い海が描かれているはずだったが、怜がしばらく部活をさぼっているあいだに、 に変じていた。キャンパスのうえ

で、闇からにじむ暗紫の波濤が逆巻く。マルちゃん、新境地だな、と怜は呑気に思ったものだが、あれは自身に対する不安やあせりを感じた丸山の、荒々しい心象風景だったのかもしれない。

怜とはえば画用紙に適当に絵の具を塗りたいく、抽象画だと言い張ってお茶を濁した。

「マルちゃんはずっと真剣に絵を描いて、美大を目指してきたんだから、ちらっとそんなふうにも思っちゃうのも当然なんじゃないの」

「でも、骨折だよ？ 大怪我だ。なのに一瞬でも喜ぶなんて、ほんとサイテーだ」

「いや、カンチョーが原因の骨折だし……」

なんとか丸山の気持ちを楽にしたくて、怜は必死になだめようとしたが、

「いいんだ、怜」

と丸山は立ちあがり、浴槽から出ていく。「とにかく自分のサイテーぶりをだれかに聞いてほしかっただけで……」

(中略)

「俺はマルちゃんのこと、サイテーなやつなんて思わない」

気恥ずかしかったが、怜は思いきって言った。「むしろ、いいやつだと思ってる。いままでも、美大の話聞いたあとも」

怜とてだれかに嫉妬するほど経済学部を志してみたものだが、到底無理だ。絵を描くことに対する丸山の情熱、秘められたうねりは、怜にはまばゆく感じられた。そんな情熱を抱えながらも、心平の降って湧いたような美大受験話に対して親身に相談に乗ってやり、才能を認め、自身の物思いを醜いと嫌悪する丸山の優しさ、誠実さを、好ましく受け止めこそすれ、いやだなどと思うはずもない。

丸山はサイダーを飲み干し、

「そうかな……。さんきゅ」

と照れくさそうに言って、小さくげっぷをした。

出典 三浦しをん『エレジーは流れない』

※1 寿絵……「怜」の母親。

※2 山本先生……「怜」たちの担任教師。

※3 鷹揚……ゆったりとしていて小事にこだわらないさま。

※4 波濤……大波。

問一 二重傍線部「ちよつと笑つた」を文節で区切ると「ちよつと笑つた」となります。この文節と文節の関係と、同じ関係になるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家で犬と猫を飼っている。

イ 父がリビングのソファで眠る。

ウ 今日は寒いのでコートを着る。

エ 対岸から友人が手を振っている。

問二 傍線部①「いいね。ちよつと待ってて」とありますが、この時の「怜」の心情について次のようにまとめました。

入る適切な内容を、八字以内でまとめなさい。

「怜」はすでに入浴を済ませていたものの、浮かない表情の「マルちゃん」を見て「のだろう」と思い、一緒に風呂に行くことに賛成した。

問三 傍線部②「俺さ、自分がいやになったよ」とありますが、ある生徒が「マルちゃん」の気持ちについて次のようにまとめました。

Ｙ に入る適切な内容を、は二字で、は六字以内で書きなさい。

「マルちゃん」は「心平」が作った馬の埴輪を見たことがきっかけで、「心平」に対してを抱き、それと同時に自分に対してとairaだちを感じている。

問四 本文中の A に入る表現を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんどんと イ おずおずと ウ しぶしぶと エ ぐどぐどと

問五 本文中の B に入る適切な内容の文章を、考えて書きなさい。

問六 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「怜」は「隣にいたる丸山をさりげなくうかが」うような臆病な性格であり、そのため「マルちゃん」のいらだちを鎮めるのに必死になっている。

イ 「マルちゃん」は自分の気持ちをあまりうまく言葉にできない反面、「掌で二度ほど湯を叩いた」のように、動作には感情が強く出ている。

ウ 「マルちゃん」は「心平」の学科試験について「また俺たちが特訓してあげればいい」と考えるようなお人好しのため、自分の感情を抑えてしまう。

エ 「怜」は友人の様子の変化に敏感な性格で、人の気持ちに寄り添いつつ、「気恥ずかし」いながらも誠実に言葉を伝えることができる。

〔問題はここで終わります〕

国語解答用紙

※印の欄には何も記入しないこと

一 14点

問一 4

問二 4

問三 2 地域の自然や人間、歴史、文化という。

問四 4

二 16点

問一 14	⑦	①
⑬	⑧	②
⑭	⑨	③
⑩	④	
⑪	⑤	
⑫	⑥	

問二 14

問二 14

三 18点

問一 3 以夜継日

問二 3

問三 3

問二 3

問四 3

問五 3

四 28点

問一 2

問二 2

A

B

C

D

E

問三 4

問四 2

問五 4

X

問五 2

Y

問五 4

問五 4

Z

五 24点

問一 3

問二 3

問二 3

問三 3

X

Y

問三 3

問四 3

問五 6

問六 3

受験番号

※合計

※五 問二三五

※五 問一四六

※四 問五

※四 問一三五

※三

※二

※一

これから国語の放送による検査を行います。

はじめに、解答用紙を出して、受験番号を決められた欄に記入してください。

間 10秒

次に、問題用紙の1ページを開いてください。

間 3秒

四角1は、放送による検査です。内山節さんの著書『戦争という仕事』の一節を読み、次にその内容についていくつかの質問をします。文章は一回しか読みませんので、必要があればメモを取ってもかまいません。およそ1分後に放送を開始しますので、問題用紙や解答用紙に不備がある場合には、手を挙げて試験監督に交換してもらってください。

間 1分

それでは、始めます。

間 3秒

いま二十世紀を振り返ってみると、この時代の価値基準のひとつに「快適さ」があったように思う。私たちは快適さを求めて冷房や暖房を多用するようになった。誰もが携帯電話を持ち、家には電気製品があふれるようになった。そして私たちは、少しでもわずらわしいと感じることを拒否する傾向を深めるようになる。

もちろん、いつの時代でも、人間は一面では快適さを求めてきたといえる。太古の人々も寒い日には火をたいたことだろう。家屋や衣服をつくり、この暮らしがこわれないことを神々に祈った。

とすると二十世紀における快適さの追求も、太古からつづく人間の欲求の延長線上のものなのだろうか。私には違うような気がする。

ひと昔前までの快適さのなかには他者が存在していた。家にはともに暮らす者たちがいて、その人たちが火のまわりに集まっていた。人と人の結びつきがなければ生まれない快適さがそこにはあった。春がもたらす心地よさや、さわやかな秋、夏の風と木陰、鳥や虫の声。それらは自然という他者がいるからこそ成立する快適さである。

快適な地域のなかで暮らそうと思えば、地域の自然や人間、歴史、文化といった他者が必要になる。いわば、かつての快適さとは、他者とともに作りだされていくものであった。

二十世紀の価値基準になった快適さは、それとは違っている。快適さが、個人の保有するものへ、個人のためにつくられるべきものへと変わったのである。冷暖房を完備した個室、個人が移動するための車、そして携帯電話。誰にも干渉されない消費と生活。インターネットもまたこの個人のあり方を拡大した。自分だけの世界が絶対的なものになり、それに干渉するすべてのものが快適さの敵になった。

他者は、快適さとともに作りだすための協力者ではなくなり、自分だけの世界を侵害しかねないものとしてとらえられるようになった。こうして私たちは、自然が自分だけの世界を侵害すると思えば自然を排除し、地域社会や人間関係にそれを感じれば、それらを排除して自分だけの世界を守るようになっていった。あるいは、自分だけの世界をけっして侵害しない他者しか、私たちは認めなくなっていったのである。

間 3秒

それでは質問にうつります。質問は二回繰り返します。解答はすべて解答用紙の決められたところに記入してください。

間 3秒

問一 二十世紀になって人々は何を拒否するようになったのでしょうか。わかりやすく答えなさい。

問一 二十世紀になって人々は何を拒否するようになったのでしょうか。わかりやすく答えなさい。

問 1 2 秒 わずらわしさ わずらわしいと感じること

問二 二十世紀になって人々の快適さを拡大したものは何でしょうか。例として挙げられているものをひとつ答えなさい。

問二 二十世紀になって人々の快適さを拡大したものは何でしょうか。例として挙げられているものをひとつ答えなさい。

問 1 2 秒 携帯電話 電気製品 インターネットなど

問三 ひと昔前までの快適さは何によって成立していたのでしょうか。解答欄に合わせて答えなさい

問三 ひと昔前までの快適さは何によって成立していたのでしょうか。解答欄に合わせて答えなさい。

問 1 2 秒 地域の自然や人間、歴史、文化という（他者）

問四 この文章の内容に合わないものを、次の1・2・3・4の中から一つ選び、数字で答えなさい。

1 私たちが二十世紀における快適さを求めているのは、人間の本能的な欲求によるものである。

2 二十世紀の人々は、自分だけの世界を侵害するものを敵として認識し排除するようになった。

3 かつての快適さは他者とともに作りだされるもので、二十世紀の快適さとは違うものである。

4 二十世紀の快適さは、個人の保有するものとして個人のためにつくられるべきものへ変わった。

問四 この文章の内容に合わないものを、次の1・2・3・4の中から一つ選び、数字で答えなさい。

1 私たちが二十世紀における快適さを求めているのは、人間の本能的な欲求によるものである。

2 二十世紀の人々は、自分だけの世界を侵害するものを敵として認識し排除するようになった。

3 かつての快適さは他者とともに作りだされるもので、二十世紀の快適さとは違うものである。

4 二十世紀の快適さは、個人の保有するものとして個人のためにつくられるべきものへ変わった。

問 1 2 秒

これで放送による検査を終わります。あとの問題が続けて解答してください。